
有限世界の冒険

守木菜つくし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有限世界の冒険

【Nコード】

N7217C

【作者名】

守木菜つくし

【あらすじ】

行方不明になった親友を探しているうち、晃一はRPGのような異世界探検に参加することになった。この世界は何なのか。親友は何処へ行ったのか。怪しいの一言に尽きる会社の真意は何か。半分以上納得しにくい事態と謎を抱えたまま、晃一は初級冒険者として小さな仲間と共に旅を続ける。

プロローグ

【世界の不思議を解き明かしてみませんか】

その年の始め、そんな旅行のキャッチコピーがTVやラジオ、インターネットを駆けめぐった。

宣伝文句はミステリーじみではいたが、水土中旅行企画みとなかというどこか胡散臭い名前が逆に人目を引いたらしい。

しばらくしてネットの掲示板などで、少しづつ旅行の内容や会社のことが書かれるようになる。

その書き込みのほとんどは旅行が楽しかったというものだが、怪しいものも幾つかあった。

ツアー終了後、しばらくして客だった人間が行方不明になっているというのだ。

しかし、警察の方でも調査をしてみたが、旅行の最中ならいざ知らず、終わってからでは会社の方に原因があるとは言えない。

そして、この様な不気味な噂があっても、旅行代理店のツアーは高い人気を保っていた。

ツアーが名も知られていないような田舎や荒野、はたまた密林など危険を伴う地帯などが多かったからである。

これらは、強い刺激を望む好奇心旺盛な人々の予約で常に満杯だった。

初心者専用宿屋 その1

その道は何処までも真っ直ぐ続いていた。

周囲は霧が深く立ち込め、道以外のものを覆い隠している。

この中を一人の若者が緊張した面持ちで歩き続けていた。

なんとなく正しい方向に進んでないような気がしていたのだ。

だが、引き返すタイミングは既に失っている。

彼は覚悟を決めて歩き続けた。

しばらくして、先程まで道だけしか分からない状態だった霧が急に薄くなる。

「あれ……かな？」

前方に一軒の民家が見えた。

間違っていたとしても道くらいは聞けるだろうと考え、若き旅人は歩調を早める。

そして段々と近づくにつれ、彼は民家が目的の場所だと確信した。

看板に書かれている『初心者専用宿屋』の文字はとても大きく、読み間違えることはあり得なかったからである。

「いりゃっしやい」

癖のある発音で若者を迎えたのは、とても体格の良い男だった。

「初心者専用宿屋・“霧の中でビックリ亭”によく辿り着いたな」

さすがに身につけているエプロンに『宿屋の主人』と書かれているのは、胡散臭い気がしないでもない。

若者は戸惑いながら、身につけていた腕輪を外した。

それはあまり飾りがなく、中心に光る石がはめられている。

「お前さんは“外”から来たのか」

宿屋の主人は腕輪を受け取りながら尋ねる。

「友人を探しに来ました」。

「この世界は初めてなので、色々と教えてください」
彼の様子に、相手はにやりと笑った。

「兄ちゃん。この世界で情報を得る場合は代価を払わないとならない。」

「タダでもらった情報は、嘘が混じっていても仕方がないという事だ」

「若者は困ったように服のポケットなどを調べてみた。しかし、何も持っていない。」

彼の行動に宿屋の主人は可笑しくなったのか、笑いながら足元から二つのバケツを取り出した。

「ここは初心者用の宿屋だ。情報料は安くしておいてやる。裏に井戸があるから、外の大瓶を全部洗って水を入れていおいてくれ」

「この労働条件を彼に拒否する権利はない。」

「わかりました」
若者はバケツを受け取る。

「それから汲んだ水の中に魚が入っている事がある。初心者専用宿屋で一回は行える“運試しの魚”だ。兄ちゃんの旅を占ってくれるぞ」

そして宿屋の主人は

「噛みつかれるなよ」
と言つて裏口への扉を開けたのだつた。

結局、若者が与えられた仕事を終えた頃には、夕暮れに近い状態だつた。

「こんな状態でアイツを探せるのか？」

彼はそう呟きながら、魚の入ったバケツを持った。

宿屋の主人が運試しと言つたが、この魚は最初に水を汲んだ時に入っていたのだ。

お蔭で二つのバケツのうち一つは、魚に占拠されてしまう。

効率よく井戸と大瓶の間を往復出来なくなったのは辛い。

宿屋の主人を呼んだが、占いは魚の有無や種類では判断しないと
言われてしまう。

「魚を得た事で事態が動く。それが占いの結果だ」

そう言って、宿屋の主人は宿に戻ってしまう。

今もそれは与えられた狭い世界を窮屈そうに泳いでいた。

グロテスクな姿と派手な色合い、そして大きな目をギョロギョロ
と動かしている。

かなりインパクトの強い魚だった。

掃除を終えたと報告する為に宿屋のドアを開ける。

すると、とても美味しそうな匂いが漂ってきた。

彼は自分が空腹であることを思い出す。

「ご苦労さん」

宿屋の主人は若者から二つのバケツを受け取ると、そのまま若き
初心者食堂に案内する。

「スミノエ コウイチ殿。食事を終えたら幾つか確認をする。

正直に答えてくれ」

若者は自分の名を突然言われて、驚きのあまり硬直してしまった。

「なぜ名前を……」

「なぜ何も、ここは初心者専用宿屋だ」

意味不明の返事に、墨江晃一はますます首を傾げてしまったのだ
った。

初心者専用宿屋 その2

テーブルの上には美味しそうな料理が用意されていた。

「一応、“外”から来た人間が食べても大丈夫だ」

宿屋の主人の言葉に、晃一は驚いてしまった。

「この世界では危険な食べ物があるのですか？」

相手はその問いに曖昧に頷くと、まずは食事を取れと言ったのだ。
った。

彼は席に着き、出された料理を口にする。

宿屋の主人は晃一とテーブルを挟んで前の席に座った。

お腹が空いていたので、彼は宿屋の主人の視線は気にならなかった。
た。

（これはパンに似ている。こっちは肉だけど、香辛料がキツイな…）

何だか料理番組の解説だなと思いつつ、晃一は料理を味わう。

「兄ちゃんを脅かすように悪いが、これも仕事だから我慢してくれ」

そう言いながら、彼は晃一から預かっていた腕輪をテーブルの上に出した。

「この世界は兄ちゃんの常識が部分的に通じない場所だ。そこを旅するというのは運が悪ければ野垂れ死ぬ事もある。」

さっきの水汲みは、兄ちゃんの人柄を見る為の一環だ」

人によっては宿屋の主人を怪しみ、そのまま何処かへ行ってしまう人間がいるらしい。

宿屋の主人はそんな説明をした後、『霧のボルボロア』という通り名を晃一に教えた。

「この腕輪には兄ちゃんの個人情報が入っている。」

そしてオレから見ると、兄ちゃんは普通の人間だ。

ここでは初心者専用宿屋では腕輪の情報を読み取って、良しとし

た人間に世界を旅する許可証を与える仕組みになっている。

さつき専用の道具で許可証を組み込んだから、兄ちゃんの人柄はこのオレが保証したということだ」

にやりと彼は笑う。

晃一は食事を取りながらも、何か嬉しくなった。

この世界に来る前に色々と感じていた不安が、少しだけ和らぐ。

宿屋の主人は言葉を続けた。

「兄ちゃんは運がいい。

ボルボロアの名の入った許可証は滅多にない」

「そうなんですか」

「何せ、この宿しかやってない」

晃一は笑って良いのか分からず、苦笑いしながら食事続ける。

異世界の食べ物少し癖があった。

食事の時間が終わり、ボルボロアが食後の飲物を持ってきた。

その綺麗な青に、晃一は飲むのを一瞬ためらう。

しかし、彼は宿屋の主人が変なモノを作るとは思わなかったので、

思い切って口にしてみた。

コーヒーよりも苦い飲物だった。

晃一は思わず顔を顰める。

「苦かったか？」

「はい」

「そうか。よく知り合いからオレの料理は変だと言われる」

そう言っつて、ボルボロアは豪快に笑った。

「一応、“外”との取り決めでこれから幾つか質問をする。

嘘を混ぜるから、その都度訂正してくれ」

「わかりました」

相手の真剣な様子に、晃一は胃に重いものを感じながら答えた。

「名前はスミノエ コウイチ」

「そうです」

「年齢は35歳」

「17歳です」

既に嘘の領域を超えた質問である。

「異世界に渡る理由に友人を探すと申告したらしいが、そいつは行方が分からないのか？」

改めて尋ねられて晃一はどう答えようかと迷った。

自分でも何が本当の事なのか分からない所があったからだ。

「この世界から戻ってきた記録が無いと言われました」

ボルボロアは書類に目をやりながら、自分の推測を口にした。

「戻れなくなつたのか、戻る気がないのか……」

この言葉に晃一は表情を曇らせたのだった。

初心者専用宿屋 その3

そんな晃一の様子を見て、仕事で尋ねている方はあっさりと話題を変える。

「まあ、そんな事は本人にしか分からん話だ。質問を続けるぞ」

「はい」

「この世界について“外”から説明を受けているとは思いますが、ここではそれなりに仕事で報酬を得ないと旅を続ける事は出来ない。

何かやりたい職業はあるか？」

この問いに晃一は緊張で胸が痛くなった。

「それが、俺は武器とか使えないんです」

異世界を探索するには、身を守る事も考えなくてはならない。

この説明は元いた世界で何度も聞いた。

それでも諦められず、強引に送り込んでもらったのである。

あの時は何とかかなると思っていたが、実際に異世界へ来ると問題の重大さが重くのしかかってくる。

しかし、ボルボロアは紙に何かを書きながら軽く返事をした。

「身を守れば、一人で旅を続けられる。その能力がないのなら、誰かと協力して旅をすればいいだけだ。

最初から悲観するのが趣味なら止めないが、まずはやれる事をやってみてはどうだ」

「やれる事ですか？」

「実は兄ちゃんが捕まえた“運試しの魚”なんだが、あれは食えない。

ジュデイボという魚なんだが、俺のような料理人でも美味しい料理が作れない代物だ。

だが、ここから南に3チリ行った所にある『アズ』の村に持っていけば面白い事が起こる」

楽しそうに言われても、晃一には何の事だか分からない。

それに、ボルボロアの料理の腕も信じきれないところがあった。ただ、1チリは4キロメートルだと前もって説明を受けていたので、おおよその距離を頭の中で計算する。

「どんな事ですか？」

彼の言葉にボルボロアは豪快に笑う。

「この場で言ったら面白くないだろ。行けば分かる話だ。

ジユデイボは運試しの魚なのだから、兄ちゃんのこれからの旅を占う意味もある。

「こことアズの村を往復して、よく考えてみるといい」

彼はそう言っただけで立ち上がると、晃一を部屋に案内した。

外は既に夜となっており、初心者が出歩くのは死を意味する時間になっていたのである。

彼に用意されていた部屋は簡素な内装だったが、ヘトヘトに疲れている晃一にはどうでも良かった。

安心して眠れる場所がある。

（なんだか旅行会社が説明してくれた所と違っている気がしたけど……、良かった……）

緊張で眠れないかもと彼は思ったが、実際にベッドに潜り込むと直ぐに瞼が重くなった。

そして次に晃一が目を覚ました時、窓からは光が差し込んでいた。彼はおおよその時間帯に気がつく。

（もしかして……もう朝なのか！）

異世界に来る前は、宿屋に泊まっても眠れるのかと考えていた。だが実際は熟睡しており、夜中に一度も起きなかつたのである。彼は慣れない服を何とか着替えると、慌てて部屋を出た。

昨日は宿屋を目的としたが、今度は場所もよく分からない村へ行かなくてはならない。

もしかすると不慣れな自分では、民宿の主人の言う移動距離・約

12キロメートルでは済まないかもしれないのだ。

晃一は素直に、弁当について宿屋の主人に尋ねてみようと思った。

初心者専用宿屋 その4

奇妙な味付けの朝食を終えると、晃一はジュデイボのいるバケツに近付いた。

魚は窮屈そうにバケツの中を泳いでいる。

バケツに水を入れたまま運ぶという事に、彼は既にウンザリしていた。

そこへボルボロアがやって来て、魚を編み目の袋にいきなり入れたのである。

「兄ちゃんのところはどうか知らないが、ジュデイボは水の外に出しても平気で生きている。」

これだけの大きさなら、たまに水の中に入れるだけでアズの村まで大丈夫だ」

袋は水の重さも加わって、かなり重い。

しかし、バケツを借りて移動するよりは楽である。

「ありがとうございます」

そう言って、晃一は袋を受け取った。

「夜に出歩く生き物は昼のよりも危険なのが多い。」

もしアズの村を出るのが夜になりそうなら、村長に頼んで泊めてもらえ」

「わかりました」

「あいにく地図のような便利なものは、町に行かないと手に入らない。」

少し遠回りだが道を外れないようにしろ」

村へ行くための注意を受けながら、晃一は簡易的な食料を手渡される。

小さくまとめられた食料は、結構な重さがあった。

「色々ありがとうございます」

二度目の礼を言うと、ボルボロアは笑いながら晃一の肩を軽く叩

いた。

「兄ちゃん、頑張れよ。」

とにかく“外”へ戻るには専用の宿屋を経由しないとならぬから、まずはちゃんと戻って来い」

「はい」

晃一は宿屋を出るとボルボロアの指さす方向を見る。

今は霧も出ておらず、アズの村がある方向には平原が続いていた。

「一応、短剣を貸しておく。お守りとして持っておけ」

それは、木で作られた鞘に入っている短剣だった。

晃一が試しに抜いてみると綺麗に磨かれた刀身が現れる。

(あれっ?)

彼は短剣をじっと見た。

一瞬だけ何か模様のようなものが見えたような気がしたからである。

しかし、改めて見直してもそのようなものは見当たらない。

「兄ちゃん。目利きかい?」

「いえ、違います。すみません、短剣が珍しかったので見取れていました。」

では行つてきます」

晃一は慌ててアズの村へと歩き出す。

その姿を見て、ボルボロアは苦笑いをしながら頭を掻いた。

「あの兄ちゃん、ヤバイ奴に目を付けられなきゃいいが……」

そう呟いた後、彼は宿に入る。

しばらくして、『霧の中でビクリ亭』の周辺に白い煙が掛かり始めた。

それは霧のように周囲に広がり、ついには宿屋を覆い隠す程になる。

(えっ……)

映像の早回しのような現象に、晃一は何事かと思ってしまう。

この時、彼は自分が霧の発生に関するメガにズムについて詳しくないことを残念に思った。

だからといって、この世界で自分の知識がどれほど役に立つのかは分からないのだが……。

とにかく道が消えたわけではないので、彼は村を目指すことにした。

ちなみに袋の中のジュデイボは、結構元気に暴れている。
服が濡れることに関しては、諦めの境地だった。

（旅の仕方と地図の書き方も知っておいた方が良いのかな……）
元の世界に戻ったら、速攻で図書館へ行こうと心に誓う彼であった。

アズの村へ その1

平原の道を一人歩く。彼の他に人の姿は無い。
たまに鳥が大空を飛ぶ。

ついでに何か光るものも飛んでいた。

晃一は歩いている途中で何度も見かけたが、変な光という事くらいしか分からない。

(ボルボロアさんなら知っているかな?)

しかし、彼にものを尋ねる事になれば対価を支払わないとならない。

(吹っ掛けられたら、それだけ重要なことなのだと思って聞くのを止めた方がいいな……)

そんなことを考えて、晃一は苦笑してしまった。

かなり異様な状態に置かれているというのに、既に馴染みはじめている自分がいる。

(……)

袋に担いでいるジュデイボは、時々大きく身体を動かしていた。

道は平原から森へと伸びていた。迂回するにしても森の規模が分からないので、晃一はそのまま歩き続けた。

陽の光が結構入っているので、そんなに暗いという印象は無い。

彼は心の中で危険な動物に遭わない事を祈った。

ところが、災難は彼を見逃す事なく降りかかったのである。

魚が袋の中で動かなくなったのだ。

心配になって袋の中を覗いてみると、ジュデイボはピクリとも動こうとしない。

(もしかしてヤバイのか!)

晃一は慌てて袋を担ぐと、今度は歩調を早める。

水場を探すべきかアズの村を目指すべきか。

彼は迷っていた。

ジュデイボという魚に関しては何の基本情報も持っていないので、どれくらい無茶が出来るか見当がつかない。

(水筒を用意するか、バケツを使って移動するべきだった)

焦りと不安で気が重くなってきた時、いきなり目の前に小さな沼が現れた。

道が左に大きく曲がっていたのだが、それはこの沼を迂回していたのである。

(焦りすぎて全然気がつかなかった……)

晃一は苦笑してしまう。

『土地の人に許されている事でも旅行者には駄目なモノがある。

見知らぬ場所では常に謙虚に振る舞う事』

祖父はよくそう話した。

(そういえば、じいちゃんに会いに行っていないなあ)

その教えを彼は実行する。

「え〜っと、沼の主さま。失礼します。

ジュデイボを少し休ませてください」

居るのか分からない水場を支配する者へ挨拶をすると、彼は腰掛けるのによさそうな岩場へと移動した。

足場を確認しながら、彼は袋ごと魚を水に浸ける。

途端に、ジュデイボは水しぶきをあげた。その音が沼に響く。

近くに生き物がいる気配も感じられない。

沼地は静かすぎるくらい音のない世界だった。

こうなると、元の世界なら不思議な雰囲気沼ということに済む話でも、異世界ともなると本当に沼の主が実体を伴って出てきかない。

一気にホラー映画のエキストラのような気持ちになる。

ジユデイボは水を得て悠々と袋の中を泳いでいた。

沼は木漏れ日を受けてキラキラと輝いている。

(もうすぐ昼かな?)

持っていた腕時計は異世界に来る前に外したので、晃一には時間を確認する術がない。

(……)

何をすれば良いのかという事すら、今の彼には判断しかねた。

『異世界へ行くというのは、それこそ最初から何の保証もありません』

彼は不意に、旅行会社側の説明を思い出す。

最初はいいい加減な事を言う担当者だと思っていた。

だが、実際に来てみると相手は本当のことを言っていたのである。異世界名・オムニアム。

ここは”外”から来た人間に安全を約束できるような場所ではなかった。

アズの村へ その2

晃一は乾いた岩の上に腰掛けると、沼をぼんやりと眺めながら。

(初めて説明を聞いたときは、どこの夢物語かと思っただけ……)

実際に来てしまふとなると、ただの夢物語では済まされない。

うっかり危険なことをしてかせば、確実に自分の命に関わるのだ。
(本当にアイツを見つけれられるのか?)

いるのかどうかもわからないのに……という考えを無理矢理うち消して、晃一は再び立ち上がる。

自分もまた休息が取れた。

あまり長居すると、アズの村に辿り着けなくなる恐れがある。

「沼の主さま。お邪魔しました」

沼に向かって挨拶をした後、彼は沼からジュデイボの入った袋を引き上げた。

袋は水分をたっぷり含んで重くなっている。

「あれ??」

下の方を見てみると、紐のようなものがくっついていて。

確認の為引っ張ってみると、やはり紐だった。

しかも、袋に小さな穴が開いている。

(まさか!)

慌てて袋の中を覗いてみると、ジュデイボは逃げ出しておらず口をパクパクと動かしていた。

道は森を抜け、分岐する事なく伸びている。

周辺には点在する木々と野原と大空が広がっていた。

しかし、晃一は未だに村らしいものどころか人の姿も見えてはいない。

晃一はいったん立ち止まると、周囲を見回した。

(こっちで良いはずだよな……)

なんとなく方向を間違えているのではないかと疑いたくなるが、目印になるようなものはない。

結局、彼は経験不足ゆえの戸惑いが残る直感に従うしかない。

『こことアズの村を往復して、よく考えてみるといい』

宿屋の主人が言った言葉を思い出し、晃一は溜息が出てしまった。
(ただ歩いているだけなのに、随分気を付けなきゃならないことが多いんだな)

親友もこんな気持ちで旅をしたのだろうか。

そう考えつつも、親友は猪突猛進型だった事を思い出した。

(だめだ。勢いに任せて行動するアイツしか思いつかない……)

そしていつの間にか、親友はとんでもない事に首を突っこんでい
るのだ。

晃一はそつちのほう当たっているような気がした。

(……あれ?)

彼はこの時、前方に二つの人影らしいものを見付ける。

それはこちらに向かって移動していた。

(ボルボロアさん以外で、初めてこの世界の人と会うんだ!)

旅行会社からは初心者専用宿屋の主人以外には、自分たちが異世
界から来た事を知られないようにするよう何度も念を押されている。
(とにかくアズの村への道を確認させて貰おう)

どんな風に話しかけるのかを頭の中で何度もシミュレートを行う。
道の向こうからやって来るのは、釣り竿のようなものを持った老
人と小さな子供だった。

その二人が晃一の存在に気が付く。

晃一はいよいよだと思いきや言葉を発しようとした時、子供の方がい
きなり彼に駆け寄った。

「兄ちゃん。何処の水場に落ちたんだ?」

急に話しかけられて、晃一は言葉に詰まる。

(水場つて……、袋が濡れているからか?)

水場には落ちていないと訂正するべきかと思っただが、老人の方が発言が早かった。

「ケイン。いきなり失礼じゃぞ。」

その人の場合は荷物が濡れているだけじゃ」

しかし、子供は怒ったかのように反論した。

「荷物でも何でも、こんなにも濡れているんだ。絶対にこの兄ちゃんは”ニゲヌマ”に居たんだよ」

その断言に老人は晃一を疑わしそうに見る。

「晃一の方は話が全然分からなかった。」

アズの村へ その3

「あの……。話が全然見えないので、何を俺に聞きたいのか教えてください」

晃一の言い方に、こちら辺を知っている人間ではないと分かったらしい。

老人が森の方を指さす。

「おぬし、あの森で水場を見はせんかったか？」

そこは先程まで彼が休憩していた森だった。

「小さな湖というか沼がありました」

ちようど魚に水を与える必要があったので助かりました」

すると子供の表情が明るくなった。

「フオドさん。やつぱりあの森に”ニゲヌマ”はあつたんだ」

「確かに、この兄さんの荷物がまだ濡れているということは、あの森に水場があるということになるのお」

老人は晃一の顔を見る。

「兄さんはこれから何処へ行くんじゃ？」

「一応、アズの村です」

「それなら道は間違つておらん」。

もしかして知り合いが村におるのか？」

何処まで突つ込んだ質問をされるのか晃一には見当がつかない。

だが、子供の方が目を輝かせて自分を見ているので、あまり変な対応はしたくない。

自分に落ち着くよう念じながら、彼は会話を続けた。

「村に知り合いはいません」。

ただ、アズの村に魚を持って行ってみようと思っただけです」

食えない魚を持って行って何になるのかは、晃一自身にも分からない。

しかし彼は、何も無くても良いように思えた。

「なるほど。それなら商売がやりやすいよう口添えをしてやるから一働きせんか」

そういう老人の表情は、既に晃一に協力をさせようとする気満々だった。

「まずはケイン。この兄さんの魚を村に持っていけ」

フォドに言われてケインは頬を膨らませた。

「僕も行く!」

しかし、老人は首を横に振った。

「駄目じゃ。このままでは兄さんの魚が弱ってしまつう。」

お前の足なら、すぐに村へたどり着けるだろう。

人に何か頼むときは、なるべく相手の負担にならないように行動しなくてはならん。

そうでないと、この兄さんが適当な案内をしてもワシらは文句は言えんぞ」

そう諭されて、ケインは渋々晃一の袋を持った。

「兄ちゃん。魚はちゃんと持っていくから、フォドさんを案内をしてよ」

彼は大きな袋を担いで村の方へと引き返す。

ただ、フォドが言うほどすぐではなさそうな足どりではあった。

「さて、ワシらも森へ行こう」

晃一を沼へ引き返させることになる為、フォドは自分たちの目的を説明し始めた。

「兄さんの名はコーイチと言っくんじゃな」

簡単な自己紹介だったが、晃一はドキドキしながら喋る。

生国などを聞かれたら、どう答えようかと悩んでしまったからだ。

しかし、フォドは名前を聞いただけで、他のことは尋ねたりはしなかった。

「コーイチに手間を取らせる以上、こっちの事情も話しておこう」
「……」

「問題の水場は、こちら辺では幻の沼として有名なんじゃよ」
「フォドは苦笑いをする。」

「そこに盗賊が宝を隠したとかで、実はアズの村は今、ちょっと緊
迫しておるんじゃよ」

聞かない方が良さそうな話題に、晃一は自分の中で好奇心と警戒
心が働いているのが分かった。

アズの村へ その4

「盗賊ですか？」

出来れば出会わずに済ませたい職種の人たちだと晃一は思った。

「そうなんじゃ。そいつは村の祠に安置されていたセキリュウのウロコを盗んだそうだ」

「ウロコですか……」

それはどんな物なのかと晃一は考えたが、フォドの方は何やら彼の反応を訝しげに見ている。

「コーイチ。あの有名なセキリュウを知らんのか？」

その問いかけに、晃一は“しまった”と心の中で叫ぶ。セキリュウというのは、この世界ではかなり有名なものらしい。

どう誤魔化そうかと、彼は慌てて言い訳をした。

「あの、俺の住んでいた場所には、そういう話が伝わっていなかったから……。よければ詳しい話を教えてください」

一気にまくし立てたら、フォドは納得したらしい。それ以上、詮索をしたりはしなかった

「あの戦争が伝わっていないということは、随分と不便な場所から来たようじゃな」

そう言っただけで彼は、セキリュウの話をし始める。

「記録によると今から約300年くらい前に、ルーティン公国というところで一匹の赤い竜が現れたのだ」

竜はとても凶暴で、ルーティン公国に甚大な被害をもたらした。

そしてルーティン公国には宗教上、とても重要な大神殿があった。ゆえに各国から選りすぐりの武人たちが竜退治に向かったが、誰

一人として生きては戻っては来ない。

神の威光も赤き竜の前では無意味かと人々が嘆いたとき、一人の勇者が竜を退治した。

「このときの勇者の一太刀で赤竜の身体から離れたウロコが、アズに伝えられていたんじゃよ」

「そうだったのですか」

「その宝は2ネーウ前に突如として行方不明になったんじゃが、村人はその事実を隠してしまっただんじゃ」

「えっ」

「村はもともとウロコという勇者のいた証を守り、他の地域の人々は祠と村に寄付をすることで伝説となった勇者の加護を願っていた。だから収入が無くなるような事実を公表できなかつたんじゃ。」

ところが最近、隣のカレスト国で掴まった盗賊がウロコをアズの村から盗んで近くの沼に捨てたと言い出した」

「……」

信仰の対象が既に盗まれていて、祠の中に存在しないというのは確かに村にとって大問題であった。

「明日にはカレストの役人が村へ来る。あそこからの寄付は結構多かつたらしいから、本物が無ければ村人はただではすまんじゃろう」
歩き続けた二人は、ようやく森へと到着する。

ところが、いくら森の中を探索しても、沼どころか水たまりすら見つけられなかった。

「逃げられたようじゃ……」

フォドは悔しそうに呟く。

晃一も村に襲いかかるであろう災難を想像して、憂鬱になってしまった。

アズの村 その1

沼に逃げられた以上、その事を村人に伝えなくてはならない。

フォドはガツカリした様子でアズの村へと晃一を案内する。だが、案内される方は憂鬱を通り越して、得体の知れない恐さを感じていた。

(いったいどうなるんだ?)

晃一には逃げる理由はないが、どう見てもトラブルの渦中に首を突っこむことになる。しかし、ジユデイボを置いて、次に何処へ行けというのか。

(ここで俺が逃げたら、フォドさんにも迷惑がかかる)

とはいえ、この世界に来る前に旅行会社の担当から「危険を察知したら、とにかく逃げてください」と念を押されている。

(とにかく最初から逃げることを前提にする必要はないはずだ……) そう自分を納得させたとき、フォドが立ち止まって遠くの方を指さした。

アズの村が見えてきたのである。

二人が村に入ると、ケインを先頭に村の子供たちが近寄ってきた。その子らの親であろう大人たちが、不安げに二人を見ている。

「フォドさん、兄ちゃん。ウロコは見つかった?」

何かを期待しているような子供たちの眼差しに、晃一の胸は痛む。

「それが、沼に逃げられてしまったあとじゃった」

フォドは包み隠さず答える。途端に子供たちはガツカリしたように俯く。中には泣きだす子もいた。

「それじゃ、村長さんとお別れなの?」

「明日、恐い奴らが来るんだろ」

「お父さんも連れて行かれちゃうの?」

子供たちの言葉に、晃一は村の状況が自分の想像以上に深刻なの

だと悟った。役人に口頭で怒られるだけという問題ではないのだ。

「フォドさん……」

「コーイチは気にせんでいい。これはワシらが何とかしなくてはならない問題なんじゃ」

そういつて彼は晃一を村長と引き合わせた。

この村の村長は穏やかそうな老人だった。しかし、その表情は何かを諦めた印象を受ける。

「フォドさん。やっぱり沼は無かったか」

「ああ、逃げられてしまった」

「そうか。そんなにも都合よく『逃げ沼』がワシ等の前に現れるわけがないか……。だが、おかげでスッキリとした気持ちで罰が受けられる」

村長は晃一の方を見る。

「旅の人にもご迷惑をおかけした」

そういつて深々と頭を下げられて、晃一は言葉につまってしまった。仕方がないとはいえ、すれ違いのようなタイミングで希望を失った人々を見るのは辛い。

「旅の人の魚はこつちじゃ」

大きな四角い木の桶には水が注がれており、覗いてみるとジューデイボが悠々と泳いでいる。彼は半分ほつとしながらも、村人と言葉を交わせるわけもなく個性的な顔だちの魚を見続けた。

ジューデイボはというと、ときどき口を大きく開けて咳き込むかのような仕草をする。

そのうち魚の口から何かが飛び出した。

「？」

晃一は水の中に手を突っ込むと、それを拾う。

「指輪？」

小さな宝石と精密な細工が施されており、一目で高価なものだということ分かる。

「エサと間違えたのか？」

悪食にもほどがある。しかし、そういう習性の魚なのかもしれない。とにかく消化できないものを体内に入れては魚は弱ってしまうだろう。晃一はジュデイボの尾びれ付近を掴むと、思いつきり魚を逆さにした。

そして指を口につっこむ。

「とにかく吐け！」

彼の行動に子供たちが興味深げに近付く。

ジュデイボは暴れたが、その反動で口の中からキラキラと光る石が出てくる。一個出てくると魚は腹に溜めていたものを次々と出し始めた。

そして最後には、この身体の何処に入っていたのか疑いたくなるような、板のような形の真っ赤な石が吐き出される。

「赤竜のウロコだ！」

その様子を見ていた大人が叫ぶ。

晃一は思わずジュデイボの顔をまじまじと見たのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7217c/>

有限世界の冒険

2010年10月9日05時27分発行